

## 告 辞

本日ここに、平成十九年度東京農工大学卒業式及び大学院修了式を挙げるにあたり、東京農工大学を代表してご挨拶申し上げます。

先ほど、卒業証書あるいは学位記を授与されました皆さん、おめでとうございます。本日卒業される学部生は、農学部三三七名、工学部六三七名、合計で九七四名、大学院博士前期課程修了生は、農学府一七九名、工学府三四三名、生物システム応用科学府五九名、技術経営研究科五〇名、合計六三一名です。また博士後期課程修了生は、工学府四六名、同論文博士二名、生物システム応用科学府十名です。また、茨城大学と宇都宮大学、および本学で構成しております東京農工大学大学院連合農学研究科の修了式は三月一四日に行い、課程博士四十八名、論文博士十三名、合計六十一名の方々に博士の学位を授与しました。したがって、博士の合計は一一九名となります。以上を合計いたしますと、今年度本学から巣立ち行く学部卒業生、大学院修了生及び論文博士の総数は、一七二四名となります。本日は皆さんの学部卒業あるいは大学院修了をお祝いするために、本学同窓会会長、副学長、監事、名誉教授、研究院長、学府長、評議員などの方々にもご臨席いただいております。卒業証書あるいは学位記を授与されました皆様はこれまでの研鑽と努力の結果として本日を迎えられるました。我々一同、心よりお祝いを申し上げます。

本学に入学してから今日まで、皆さんには色々なことがあったことと思います。多くの人との出会いがあり、中には刎頸の交わりともいえるほどの強い絆もできたことでしょう。専門書以外の読書にふけり、新たな興味の対象を見つけたこともあったでしょう。辛く苦しかったこともあったかもしれませんが、東京農工大学という舞台上で経験したこれらのことは、何事にも瑞瑞しい感覚を持つ世代の皆さんにとっては、人間的に大きく成長する糧となったものと思います。そして、定められた課程を修め、卒業論文、修士論文、あるいは博士論文を立派に纏め上げて今日のこの日を迎えられるました。素晴らしいことであり、皆さんが示されたたゆまぬ努力と研鑽に拍手を送りたいと思いますし、一まわりも二まわりも大きくなって巣立ち行く皆さんを誇りに思います。皆さんが新しい学位取得者として東京農工大学の輝かしい歴史に序せられることは、我々の大きな喜びであり、心より祝意を表したいと思います。

さて、皆さんがこれから歩もうとする道は人それぞれに異なります。引き続き大学院に進学し、より高度な専門知識を身に着け、将来の研究者を夢見て大いに胸を膨らませている方々もおりますし、これまで大学で学んだ知識を生かし社会での活躍を夢見ている方々も多いはずで、それぞれの道は異なるとしても、自ら選んだ道に大きな希望を抱いていることは共通していることと思います。私は皆さんが持つその希望をより高いレベルの「志」へと昇華してほしいと思っております。これからはその「高い志」を持って日常の行動をして下さい。高い志とは、しっかりとした目的意識と信念のもとに掲げた高い目標のことです。皆さんにはその高い志を是非達成していただきたいと思いますが、そのためには次の3つのことが重要です。

まず一つ目は皆さんが今持っている何事にも敏感な感受性をさらに磨いてほしい、ということです。ノーベル賞受賞者である朝永 振一郎博士は「ふしぎだと思うこと、これが科学の芽です。よく観察してたしかめ、そして考えること、これが科学の茎です。そうして最後になぞがとける、これが科学の花です。」とっております。対象は科学ですが、ここでいっていることは、皆さんのこれからの人生の多くの場面に通じるものでもあります。最初の「ふしぎだ」という部分を「おかしい」、あるいは「ほんとうか」、「他にとるべき道は」などと置き換えてみて下さい。ここで立ち止まる感受性こそ大切です。研究の過程だけでなく、重要な決定を行う会議の場面や対外交渉などでも同様です。いろいろな場面で皆さんの心にすんなりと受け入れられないときには、そこに何かがあるわけです。課題が潜む「芽」に気付き、そこで立ち止まり、注意を向ける鋭い感受性が極めて大切なのです。今の皆さんはそれを論文に取り組む過程で訓練し、磨きをかけた

ことと思います。これからもそれをさらに磨き続けてください。

二つ目は、高い志に基づいた日々の努力です。これこそ皆さんを成功に導く鍵なのです。細菌学者であるパスツールは「ひらめきは、それを得ようと長い間、準備・苦心した者だけに与えられる」といっております。「天才とは1パーセントのひらめきと99パーセントの努力から成る」というのはエジソンの言葉として有名ですが、まさに「継続は力なり」です。皆さんには日々の地道な努力を通して、小さな「芽」を大きな茎に育てていただきたいと思います。その先には大輪の花が待ち受けていることでしょう。

三つ目は研究者として、技術者として、社会人としての倫理観に基づいて行動してほしい、ということです。財団法人日本漢字能力検定協会が、毎年12月12日の「漢字の日」に発表している「今年の漢字」はその年の世相を現すものとして毎年話題になることは皆さん良くご存知のことと思います。昨年は「にせ、いつわる」を表す『偽』でした。残念ながら昨年の世相を表すのに最もふさわしい漢字と思われる。大手食品会社における期限切れ原材料使用問題、旅先でのみやげの一流ブランド品ともいえる名品の賞味期限改ざん問題、老舗料亭の偽装表示問題など、食品をめぐるごまかしが相次ぎました。また、テレビ番組における捏造問題や官界における汚職問題などなど、「偽」の字に相応しい事件が相次ぎました。情けないと多くの国民が嘆いたのはつい昨日のことです。これら事件の当事者には良心の痛みを感じつつも、目先の小さな利益に目が眩んだ結果であろうと思われます。倫理観の欠如のなせるわざといつてよいでしょう。結果として、彼らは大きな物を失いました。我々はこれを反面教師とすべきです。「天網恢恢疎にして漏らさず」です。悪事は必ず露見し、善悪の応報は必ず下る、というのが自然の摂理といつてよいでしょう。皆さんには明るい未来が開けております。心に一抹の陰りも無い状態で皆さんが掲げる「高い志」を達成することを切に希望しております。

以上、皆さんの「高い志」実現に向けての3つの事項について述べましたが、次に皆さんの母校である東京農工大学の「高い志」について述べたいと思います。いま、国立大学は法人化以来、厳しい競争の時代に入りました。従来の文部科学省の画一的な管理から離れ、独自の創意工夫により大学を発展させることができるようになったわけです。本学では、これまでの永い伝統を礎に、しっかりとした教育と高度な研究を行う世界の研究中心大学となることを目標にしております。世はまさにグローバル化の時代です。本学もアジア、アメリカ、ヨーロッパの7箇所に海外拠点を設置あるいは設置準備中です。これらの拠点を中心に、海外の有力大学との連携や有力企業との産学連携、あるいは優れた留学生の招致などを行い、真に世界に開かれた研究拠点大学へと発展させたいと考えております。幸いにも、本学は各種の客観的なデータからも高い評価を受けつつあり、順調に目標に向かって発展していると考えておりますが、これに満足せず、皆さんの母校としてさらに誇れる大学へと一層の努力をしていく所存です。本学を巣立っていく皆さん、皆さんにも本学をさらに発展させていく大きな力になっていただきたいと期待しております。大きな力になるとは、皆さんに社会で大いに活躍していただき、本学の名声を高めていただくことです。皆さんのこれからの活躍に大きな期待を抱いております。

最後になりましたが、五十五名の留学生の皆さん、皆さんは異なる言語、文化、習慣の壁を克服し、学位を取得されました。これまでの努力に深く敬意を表します。これからは本学で身につけた知識や技術を母国の発展のために大いに役立ててください。さらに、皆さんの母国と日本との友好の架け橋となっていただくよう、お願い致します。

それでは、皆様にはこれまでに修得された学識と技術を存分に活かし、「高い志」に向けて活躍されますよう祈念し、また、東京農工大学のさらなる発展のため、同窓会活動などを通じて、ご支援くださいますようお願い申し上げます。ここに告辞といたします。

平成二十年三月二五日

東京農工大学長 小畑 秀文